

今回は醍醐寺の縁起(由来)と、金堂が建てられた時代などのお話です

真言宗醍醐派総本山 醍醐山醍醐寺

醍醐寺が開かれたのは平安時代、貞観16年(874)に空海(弘法大師)の孫弟子にあたる聖宝(理源大師)が、山科盆地をのぞむ笠取山(醍醐山)の山頂に小さなお堂を建てて観音像を安置したのが始まりといわれています。その後、醍醐天皇の手厚い保護により山上の醍醐伽藍が完成し、続いて平地の下醍醐が整備されました。天暦5年(951)に五重塔が落成して下醍醐が完成しましたが、幾度かの火災と心仁の乱などの戦乱で伽藍は荒廃し、特に下醍醐は五重塔を除き、そのほとんどが焼失してしまいました。

安土桃山時代になって、伽藍の復興に力を注いだのが醍醐寺三宝院門跡・義演准后(1558年~1626年)です。義演が書き残した『義演准后日記』(国宝)安土桃山・江戸前期成立)には、金堂が再建される様子が詳しく記されています。義演の大きな助けとなったのが豊臣秀吉です。義演と秀吉は強い信頼関係で結ばれていました。秀吉は、醍醐寺での壮大で絢爛豪華な花見と紅葉狩りを計画し、金堂を始めとする数々の伽藍の復興に着手しました。花見の宴から約5ヶ月後、紅葉狩りの願いは叶わず、秀吉はその生涯を終えました。伽藍の復興は秀吉の子秀頼の代に引き継がれ、醍醐寺は今日ある姿になったのです。

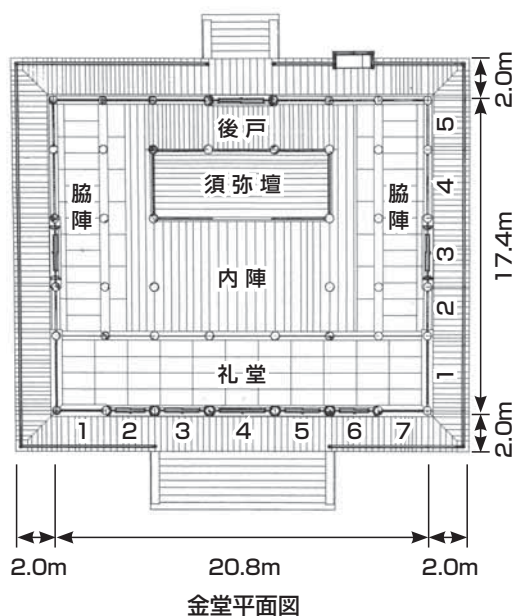
時の権力者と深い関わりを持っていた醍醐寺には、建造物や庭園、仏像、絵画、古文書など国宝69、419点、重要文化財6、522点、未指定のものを含めると約15万点の貴重な文化財が継承されています。

国宝 醍醐寺金堂

醍醐寺の本堂である金堂は、過去に2度焼失しています。初めは釈迦堂と呼ばれており、金堂と呼ばれるようになったのは鎌倉時代の頃です。

湯浅から移築された現在の金堂は、桁行七間、梁間五間(間は柱間の数を数える単位で、正面は柱の間が7つ、側面は5つという意味)の大規模な建物です。屋根は入母屋造という屋根上部の側面に壁が見える形状で、丸い本瓦で葺かれています。

内部は、柱間の広い前1間通りを礼堂とし、その後方の間口5間、奥行3間が内陣、内陣の奥には本尊を安置するための須弥壇があり、内陣の両脇を細長い脇陣、背後を後戸の空間としています。これだけの規模の本堂で礼堂を1間とすることは珍しいですが、下津の長保寺本堂など和歌山県で見られる特徴です。



金堂平面図

■金堂の建築等の経緯

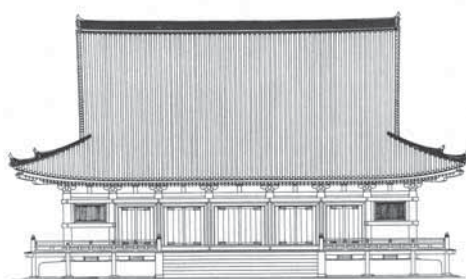
時代・年代	建築等の内容
平安時代末期 (12世紀頃)	建築当初は規模が小さく、内陣は間口3間、奥行2間と推定される
鎌倉時代後期 (13世紀後半~14世紀前半)	ほぼ現在の規模に改築
慶長3~5年 (1598~1600)	解体され醍醐寺に移築 屋根、正面などを改造
享保年間 (1716~1735)	大規模修理
宝暦13年 (1763)	屋根中央の前に張り出す向拝を付ける
昭和3~5年 (1928~1930)	解体修理し、向拝を撤去
昭和33年 (1958)	屋根の葺き替え

内陣の中央3間は、柱の部材や配置、組物と呼ばれる構造材から、平安時代末期の特徴を示しています。別の箇所では、鎌倉時代後半の意匠も見られ、また、勾配の急な屋根など移築された慶長期の技法も確認できます。

金堂の建築には、和様と呼ばれる平安時代の伝統的な建築様式が用いられており、醍醐寺に移築されても、湯浅に建っていた当時の技法が守られています。

※醍醐春秋第23号(平成6年4月 真言宗)

醍醐派宗務本庁発行「精解 醍醐寺の国宝 醍醐寺金堂」
「解説 醍醐寺金堂(山岸常人)より」



金堂立面図



金堂内陣